

気管切開 包括的ケアマニュアル

監訳：藤澤 美智子，高田 順子，武居 哲洋

気管切開患者をケアする すべての医療者のための本

気管切開患者をケアする機会は、誰にでもある。外来で、一般病棟で、在宅で、数多くの患者さんが医療ケアを受けている。一方、ケアする側は、はたして気管切開についてどれだけのことを知っているだろうか？ 自分自身を振り返ってみても、これまでのキャリアで気管切開について体系的に学んだことはなく（チューブ交換の手技を覚えてくらいである）、東京ベイ・浦安市川医療センターに来てからは都度、本書の監訳者の1人である呼吸療法士の高田順子さんに相談するようになっていた。「この患者さんは痰が多すぎないですかね」「スピーチに変えるタイミングはいつがいいですかね」といった具合に。しかしながら、気管切開に明るい人が身近にいることは少ないであろう。

高田さんから本書を紹介いただき、大変感銘を受けた。本書はまさに「気管切開をケアするための原理原則」を学ぶための本であり、安全で正しい「気管切開ケア」への、英国 National Tracheostomy Safety Project チームの想いを感じる。

本書では、気管切開患者を「首で息をする人=Neck Breathers」と表現している。そう、彼らは首で息をしていたのだ、とハッとなった。首で息をするということは上気道による加温加湿ができないことを意味しており、それ

をネブライザーなどで代替する方法を考えねばならず、また喉頭を呼吸が通らないため発声することができない。Neck Breathers は何らかの医学的適応によってそういう状態になったのであるが、何の適応によって処置がなされたのかを理解し、もしその原疾患が改善しているのなら、離脱を目指せないかをアセスメントしなければならない。

また、気管切開患者のカニューレに狭窄や閉塞などのトラブルが起きればすぐさま気道緊急となり、迅速に適切な対応を行う必要があることも強調されている。挿管の観点からするとNeck Breathers には気管切開と喉頭摘出の2種類があり、必ず区別をしなければならないことがまず第2章で強調されている。なぜなら、気管切開患者はカニューレが閉塞しても気管挿管などは開存している上気道からのアプローチで可能であるが、喉頭摘出患者は上気道と下気道が分離されているため、気道緊急の際には下気道に直接アプローチせねばならない。

第4章では、さまざまな気管カニューレの使い分けについて解説されている。複管式と単管式、カフありとカフなし、カフ上吸引、などがあるが、皆さんは目の前の患者にどのカニューレがどのような用途で使われているかを説明できるだろうか。この章を読むこ

とでそれが理解でき、適切な使い分けを能動的にできるようになるのではないだろうか。

第5章ではカフの管理、吸痰、カニューレ交換の実際、など日常的に気管切開ケアを行うための方法が極めて具体的に記されており、特に日々気管切開患者をケアする看護師にとって必読である。

第6章の合併症、第8章の緊急時対応は、特に気管切開患者を受け持つ担当医が知っておくべき内容である。真の急変前のレッドフラッグ（カフがふくらんでいるはずなのに声が出る。吸引カテが通りにくくなる）について、それを危ないと認知できる知識をつけておく必要がある。

巻末には、気管切開をケアするためのコンピテンシーが表としてまとめられている。

私は本書を読む前と後では、気管切開患者への理解が大きく変わった。理解することがより良いケアへの意識につながるものである。気管切開をケアするすべての医療者に本書を強く勧めたい。

江原 淳（東京ベイ・浦安市川医療センター 総合内科/呼吸器内科）



MEDSi
4,950円(本体4,500円+税10%)
B5/192頁
ISBN978-4-8157-3089-5